

## 研究テーマ

### 「共に学び合い、確かな学力を身につける子どもの育成」

#### ～伝え合い、学び合い、自己を表現できる授業づくりの実践を通して～

倉吉市立明倫小学校

## 1 はじめに

本校は、倉吉市の中間地に位置し、児童数約160名8学級からなる小学校である。校区には児童養護施設があり、そこから十数人の児童が通ってきており全児童の1割を超えた。

本校では、コミュニケーションで支援の必要な児童がたくさん見られる。実態をとして、「自分の考えを伝えることにとどまり、相手のことを考えた言動ができにくい。」「自分の考えを適切な言葉（表現）で伝えようとする意欲や能力が十分に育っていない。」「人や自然、ものとの主体的な関わりが不足し、感性や情緒が豊かに育っていない。」など、多くの解決しなければならない課題がある。

県中部地区小学校教育研究会の指定を受け、平成22年度より音楽科の研究に取り組んできた。音楽科の学習は、「仲間と共に音楽の楽しさや美しさを感じることができる」「共に豊かな表現を求めていくことができる」「主体的で創造的な音楽活動をとおして自己実現を図ることができる」場であり、それは本校の課題を解決する大事な場でもあったと考えた。

そこで、音楽科を研究の中心教科とし、研究主題を「共に学び合い、確かな学力を身につける子どもの育成」、副主題を「伝え合い、学び合い、自己を表現できる授業づくりの実践を通して」と設定した。そして、子どもたちが主体的に学習に取り組み、友だちと共に課題解決しながら自分の学びを実感できることをめざした。

## 2 研究の視点

伝え合い、学び合い、自己を表現できる児童

の姿をめざし、以下のように研究の視点を設定した。

- (1) 音楽科における基礎的・基本的な能力の定着をめざした指導計画の充実
- (2) 児童の意欲的・主体的な学習を促す授業づくりの工夫
- (3) 学びの実感が持てる評価や支援の工夫
- (4) 音楽学習への意欲を高め、音楽の生活化を図る学習環境の工夫

## 3 研究方法

今回の音楽科を中心とした研究が、本校の学校・学級経営に関わる大事な研究であると認識し、音楽科の指導経験の有無に関係なく全職員で取り組むことにした。音楽主任の支援を得ながら全学級担任が音楽の授業を行った。知識・技能が不十分であったため、以下のような方法で研究を進めていった。

### (1) 理論研究

- ① 学習指導要領のねらいを理解する。
- ② 音楽科学習指導における基礎的・基本的な知識を習得する。（音楽用語・共通事項などについて）

### (2) 授業研究

- ① 音楽科の授業を行い、題材に迫る授業展開になっていたか、児童同士の学び合いのある授業内容になっていたか、確かな学力をつけているかを検証する。
- ② 先進校視察・訪問研修をして授業研究に生かす。

### (3) 実技研修

- 講師を招聘したり、県中部地区小教研音楽部

の研修会に参加して、授業実践に役立つ研修を行う。(学習機材の活用法、楽器の演奏法、歌唱表現、音楽遊びなど)

#### (4) 集会 (音楽的な表現) 研究

○音楽や身体表現などにより表現を楽しんだり親しんだりする場、音楽の学びが深まる場となるような音楽集会を設定していく。

### 4 スーパーバイザーとの出会い

以前、温かく楽しい雰囲気子どもに寄り添い、的確な指導法で子どもたちがどんどん音楽の力をつけていく前田美子先生の授業を拝見した。コミュニケーション能力や表現力に課題のある本校の児童を生き生きとした学習者、表現者に変えていきたいという私達の願いを叶えるために、豊富で素晴らしい実践と実績の前田先生に本校のスーパーバイザーとして来ていただくことを強く希望し、県教育センターの事業実施の申請をした。

#### (1) 音楽の基礎を学ぶ

教師になって初めて音楽の授業を行う教師もあり、楽器の奏法をはじめとする知識・技能について前田美子先生にいていねいに教えていただいた。

1つの楽器でもいろいろな奏法があり音色が違うこと、身近な道具を用いながら楽器の成り立ちや特徴を捉えることができることなどを理解した。

また発声の方法や響く声の体感など、児童の指導をとおして、あるいは教員がやってみ



声の響きを体感する児童たち

ることをとおして学ぶことができた。

#### (2) 子どもが伸びる指導法を学ぶ

二つの曲の特徴(音色・旋律)を比べる学習を公開した。たくさん発言はあったが、発言する児童は大体決まっており、その悩みを相談したところ、『どっちの曲が好き?』って聞くのもいい。たくさんの子が思いを言うようになると思う。』と指摘してくださった。まず、どの子にも関心を持たせる工夫をすることに気づかされた。また、発言しやすいように始めはハードルを低くすることも必要であった。好きな理由を言う中で音楽の要素に関わる発言が出てくることも推測できた。(研推だより参照)

このように、前田先生は児童の実態を見て、いろいろな切り口で指導していくことの大切さを教えてくださった。パターンが必要なときもあるが、マンネリにならないことも必要だとの観点から、指導法についてたくさん引き出しを持っておられることを改めて実感した。

また、実際の前田先生の指導内容と指導の言葉の豊かさに驚かされた。指導では「短い小節で歌のリレーをし、一人でも歌えるようにする」「歌詞のイメージを膨らませ声の強弱に生かすため体に動きをもたせる」「太鼓の前で自分の声の響きを確認する」などテンポ良くたくさんの音楽活動を保障の様子を見せていただいた。

指導の言葉では「キセキ的にできました!」「体育館のあのあたりに届くように声を飛ばして!」「できる方がすっきりするね。」など子どもがやる気になる言葉、イメージしやすい言葉をどんどん使っておられた。技能面とは切り離せない教科であるため、「できない」というような否定的な言葉で評価してしまいがちになるが、前田先生の姿を見てユーモアのある温かい言葉で指導していくことの大切さを学んだ。



発声法を体で学ぶ

### (3) 教師としての姿を学ぶ

#### ① わくわくする学びの場の設定

前田先生は、毎回、指導に関する指導案や教材教具などなんらかの支援をしてくださるだけでなく、どうしたら児童が楽しんで音楽を学ぶか、どうしたら学びが深まるかなどのアイデアをたくさん出してくださった。教室環境や場の設定などわくわくするような工夫に、私達教師も「早く子どもたちに体験させたい」「喜ばせたい」という気持ちになってきた。学ぶ主体は児童であり、そのために労力を惜しんではいけないということを再認識した。

#### ② 共に楽しむ姿

指導にあたっては、言葉で伝えるだけでなく「してみせる」「一緒にする」ことの大切さを学んだ。また一緒にすることで教師と児童が音楽学習の楽しさを共有できることも感じた。教師が心を開放して子どもに近づこうと思えば、子どもが知らず知らずのうちに変わっていくことがわかった。



足を上げて、腹筋の使い方を学ぶ

#### ③ 子どもを否定をしない、だが妥協はしない

前田先生の指導は楽しいだけでなく、妥協せず最後までやりきらせる指導であった。時にはその子に合った内容に変えられる場面もあった。高学年の児童が、なかなか音がとれず、一人で歌うことに抵抗を感じていたが、仲の良い友だちと二人で歌いきることで、学習の最後には「一人でも歌いたい」と立候補した。その顔には自信が感じられた。

#### ④ 教師も妥協しない

何より妥協しないで指導されたのは私達教師の意識や姿勢であった。「鑑賞曲は、子どもたちに聴かせる前に100回は(何度も)聴くこと」「楽譜を準備して、気づいたことを書き込むこと」「関連する音楽や音源、情報を収集すること」など教材研究の大切さを教えてくださった。

音楽集会を始めた頃は、教師は児童の様子を傍観しがちであったが、一人一人に役割があり意識の改革が必要だと指摘された。集会部会で話し合いを行い、教師みんなが集会の運営に関わっていくようにした。そして、教師自らも音楽を楽しむ姿こそが児童を育てることにつながることを意識しながら取り組むようにした。

## 5 子どもたちの変化

今年度明らかに変わったのは、児童の歌声である。前田先生に高学年や合唱団の歌唱指導に関わっていただき、全校のお手本となる彼らの歌声がまず変わってきた。その歌声を聴くことによって全校の歌声が変わってきたと思う。音楽会に来ておられた保護者が、「全ての子が指揮を見て一生懸命美しい声で歌っていた姿に感動した。」と感想を伝えてくださった。また、音楽集会の全校合唱を聴いた他校の先生方にも高い評価をいただいた。

客観的に分析するために、1月にアンケートを行った。全校児童の8割が「音楽の学習が好き」と答えていた。その理由として、次のよう

なことが挙げられた。

- みんなで踊ったり歌ったりするのが楽しい。(歌唱・器楽)
- みんなで合わせたときの音の重なりが好き。(歌唱・器楽)
- どんな楽器で演奏しているのかを考えるのが楽しい。(鑑賞)
- 音楽の中でしている一つ一つの工夫がわかる。(鑑賞)
- 世界でひとつしかない旋律かもしれないし、楽器を使って演奏したりみんなで協力したりするのが好き。(音楽づくり)
- 自分たちが発表するのがわくわくする。(音楽集会)
- 発表したらコメントを言ってくれるのがいい。(音楽集会)

これらから、「共通事項をもとにして音楽の良さを感じたり伝えたりできるようになった」「音楽により深く関わるようになっていく」「音楽をとおして人と関わることを喜んでいる」児童の姿が感じられる。

## 6 教師の変化

内容が一部異なるが、教師にも昨年、今年とアンケートを取った。

昨年度はじめは教師の4分の3が「音楽の学習は苦手」と答えていた。その主な理由として、

- ▲歌うのも楽器を演奏するのも苦手。
- ▲楽譜が読めない。
- ▲音楽用語、共通事項の意味がわからない。
- ▲学習の組み立て方がわからない。

という専門的な知識・技能の不十分さを不安に思う姿がうかがえた。また、

- ▲子どもたちに音楽の楽しさや技術が伝わるか、向上が見られるか不安。
- ▲歌わせるばかり、楽器を練習させるばかりになってしまう。

と、楽しさや達成感を体感させたいができて

いない実態がうかがえた。

このような実態でスタートした研究だったが、今年度2月のアンケートでは、教師のほとんどが「音楽の学習は好き」という結果となった。主な理由として、次のようなことが挙げられてきた。

- 指導の仕方がわかってきた。
- 合唱の指揮が気持ちいい。
- 子どもと一緒に楽しめる。
- 最初は何をやってもうまくいかなかったが、自分も楽しめるようになってきた。
- 子どもたちのいろいろな表現が見られて楽しい。
- 子どもたちが音楽の学習を楽しみにしてくれる。
- センスも指導力も十分でないが、音楽は何だか心が開放されて楽しい気分になる。

これらは、今までの本校の教師にはあまり見られなかった姿であった。指導する私たちに変容が見られるようになったのは、明らかに研究の成果だと考える。

## 7 私たち教師が学んだこと

今回の音楽を中心とした研究は、音楽科だけの学びではなく、他教科の学びにもつながっていった。

まず、どの教科であっても教材研究をしっかりとすることが大事であるということである。そして、児童が学習に見通しをもてるようにすること、意欲をもって主体的に取り組めるようにすること、そのためには適切な課題設定や精選された発問が必要であることなどである。

ゴールとなる児童の姿をもっておくことも必要である。しかし、ゴールに行き着くために教師が納得する発言だけを取り上げてしまいがちにもなる。児童一人一人の見取りをしっかりとし、児童の思いや考えをどう生かしていくのか、良さをどう伸ばしていくのかを考えていく

ことも大切である。適切な評価や支援のあり方をさらに研究していく必要があると感じた。

## 8 おわりに

前田美子先生の指導を実際に見たり、実践の方法を教えていただいたりしたことで、「私たちもこんな楽しい授業をしたい」「子どもの可能性をもっと引き出したい」という意欲が高まったことは言うまでもない。

今までは、「自分ではできないから、わからないから」で音楽の授業を避けていた者が、楽しめるようになってきたことは本当に大きな変化だったと思う。「好きこそものの上手なれ」という言葉があるが、私たち教師が「音楽が好き」「音楽の学習が好き」だと言えるようになれば、よりよい授業につながると考える。

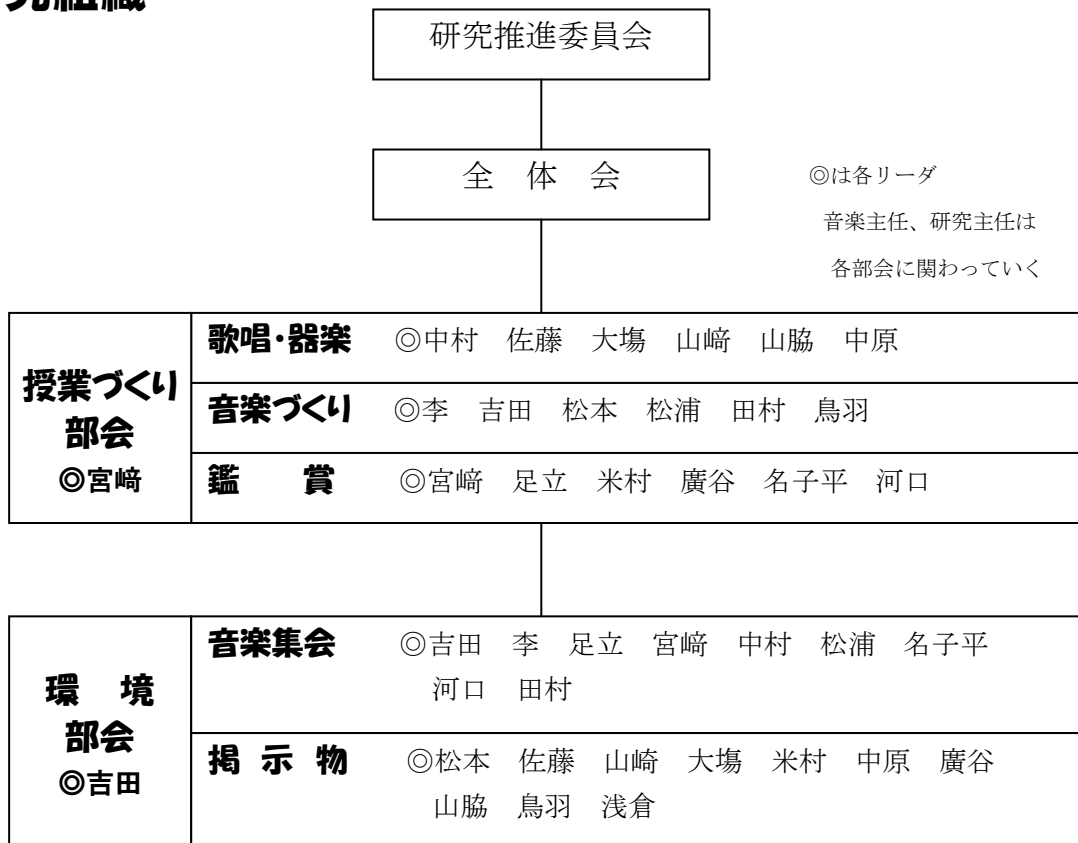
そして、「音楽が好き!」「わからないところ

やうまくできないところがあっても歌ってみたい!演奏してみたい!楽しみたい!」という児童を育てていきたい。今後も私たち教師が音楽を楽しむ姿を見せていくように心がけ、子どもたちにとって居心地の良い音楽環境を整え、子どもたちの生涯を音楽につないでいけるようにしたい。

子どもの見取りをどうしたらよいのか、何ができたら「概ね満足」になるのか、どんな支援をしたらよいのかなど、まだまだ研究を深める必要がある。音楽が苦手、好きではないと感じている児童がまだいる。それぞれの背景にあるものを捉え、その児童達が少しでも主体的に音楽に関わっていったり、音楽の良さを感じたりできるようにしたいと思う。

今回の研究で得たものをこれからも継続し、前進していきたい。その形を模索していくことがさらなる課題となる。

## 研究組織





# 研究推進だより

平成24年度



2012. 6.

共に学び合い、確かな学力を身につける子どもの育成  
—伝え合い、学び合い、自己を表現できる授業づくりの実践を通して—

## 「いろいろな音色を感じ取ろう(鑑賞)」の学習をふり返って

### 学習の流れ

- ① 「パディネリ」「クラリネットポルカ」を聴く。
- ② 2つの違いを考えて発表する。
- ③ 音色の違いを考えて発表する。

### 指導していただいたこと

\* 「音色」にしぼって考えさせる手だてを考える。

(例) 板書の工夫をする

初めにいろいろ発表させながら場所を分けて板書。(線のみ)

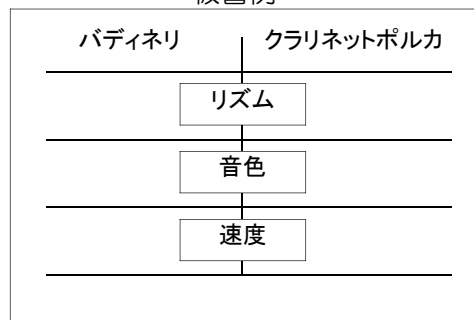


どうして分けて書いたかわかる?  
(要素に気付かせ、板書の中へ書き入れる。)



音色に焦点を絞って違いを考えさせる。

### 板書例



\* 発問の工夫を!

(例) 誰でも答えられるもの…だが主題・ねらいに迫るもの

「どっちの曲が好き?」「どうして好き?」→「音色」に絞っていく。

発問を絞る! 発問は少なく! 授業づくりについてもう一度考える。

\* 本時のねらいであるフルートやクラリネットそのものや音色に関心を持たせるための準備を!

(例1) その楽器が主役になる曲を

フルート 「アルルの女」等

クラリネット 「クラリネットこわしちゃった」等

(例2) 楽器の原点に触れる… なんでも完成品に出会わせない。

フルート…ペットボトルを吹いて音を出す

クラリネット…リコーダー 指使いも一緒

「リコーダーが上手な人はクラリネットも上手になるよ」…楽器への関心もUP

\* 鑑賞と表現…教師が旋律を覚えて歌ってやり、児童との距離を近くしてやる。

\* 鑑賞は聴き手が主体的にならなければいけない。感性を磨く・育てる学習。

\* 「これ以上ない」という研ぎ澄まされた言葉で表現させること。長々とだらだらと言わせる必要はない。

\* 教材にまつわる楽譜、CDなどを普段から集めておく。

・授業が始まる前からちりばめておく。

・自分の引き出しをたくさん持っておく。

\* 給料の一割は仕事のために使う。お金と時間を使う。